

# 琉球大学学術リポジトリ

## 『闘魚』の詩人たち —「一九三〇年前後の沖縄詩壇」補遺—

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学人文社会学部琉球アジア文化学科 公開日: 2022-04-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 仲程, 昌徳 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24564/0002017890">https://doi.org/10.24564/0002017890</a>

## 『闘魚』の詩人たち

——「一九三〇年前後の沖繩詩壇」補遺——

仲 程 昌 徳

1

大正末から昭和初期にかけての沖繩の詩壇については、先に「一九三〇年前後の沖繩詩壇」で紹介した。その時には、所在が不明だったということもあつて、全く触れることの出来なかつた同人誌があつた。『闘魚』である。

一九三〇年代前後は、沖繩でもさまざまな同人雑誌が刊行されていた。しかし、そのほとんどは所在不明のままである。また、現物を見ることのできるものでも、揃いがないのである。『闘魚』は、四冊だけだとはいえ、揃つていて、当時の沖繩詩壇の動向がよくわかるものとなつている。

『闘魚』が、創刊されたのは一九三三（昭和八）年五月。編集兼発行人が有馬潤、印刷人が石川正秋で発行所は闘魚社となつている。

第一輯は、次のように編集されていた。

作品

津嘉山一穂 ロッペン島

イケイ 雅 黒い花冠

松山晴児 詩二ツ

外山陽彦 近代村景

與儀二郎 短章

有馬潤 妻へ寄する詩

評論

有馬潤 沖繩詩人一瞥

消息記

編集後記

編集兼発行人である有馬潤は「編集後記」で、「詩誌『闘魚』を作ることにした。爬龍船解体後この方沖繩ではほとんど沈黙してきた。沈黙は必ずしも不勉強だとは云へない。ただ発表を控へただけであつて全然詩作から遠ざかつてゐた訳ではない。この『闘魚』によつてぼくはまた立ち上らうと思ふ」と書いていた。

「編集後記」を読むと、有馬が、『闘魚』以前に『爬龍船』を出していたことがわかる。しかし、『爬龍船』に関する情報は「解体」したということだけで、いつ創刊し、「解体」したかについては何も記していない。そのあたりの事情について触れたのに伊波南哲がいる。

「一九三〇年前後の沖繩詩壇」でも紹介したが、伊波は、「落葉を焼く煙」の中で、「その頃(昭和五年——引用者注)の『詩の家』には、山口芳光、津嘉山一穂、有馬潤らの沖繩出身の詩人がいた。私はこれらの詩人と親しくしていた。当時、有馬潤は沖繩の小学校で絵の先生をしながら、『詩と版画』『爬龍船』という同人雑誌を出していた。」と書いていた。また、伊波は、有馬潤が詩集『ひなた』を刊行したとき、「跋文」を寄せている。そこでも「有馬君は詩誌『爬龍船』を編集し、『詩の家』に加盟し、われわれと密接な交渉を持ち始めるに至ったものだ。有馬君は詩に、版画に造詣深く、『爬龍船』のカットになる版画なども有馬君の作品だそうだ」と書いていた。

昭和二(一九二七)年古賀残星が書いた「九州地方の文芸界」を見ると、『版画と詩』はあがっているが、『爬龍船』はない。古賀の報告からすると、昭和二年には、まだ『爬龍船』は発刊されていなかったのではないか。『爬龍船』の発刊はその後で、伊波の文章からすると昭和五年には『爬龍船』も、廃刊になっていたのではないかと思える。

正確な記述は、これからの調査を待つしかないが、有馬は『爬龍船』のあと、『鬪魚』を発刊しているのである。『鬪魚』の創刊は、伊波南哲や山口芳光らが同人として活動していた『詩の家』が廃刊になったことと関係しているようにも見える。いずれにせよ、満を持しての創刊であったことがわかる。先に引いた、「編集後記」にはそのことがよくあらわれていた。同記は、さらに次のように続いている。

今年は同人誌時代とも云へよう。沖繩文芸界にとつてよろこばしいことだが、同人誌を作ることなら、もつと文学意識の上に立ち上がつてやつて貰ひたい。よく二三号で潰れるものは、経済上の負担といふよりは、同人の心がびつたり調和しないのと、自分等の作品に少しの時間が持ち得ないのが最も大きな原因だと思ふ。

『鬮魚』は量より質で押ししていく。みられる通りの小誌にすぎぬが、内容は相当自信を持つてゐるつもりである。鬮魚に拠る同人はこれからもつと、詩道への苦勞をつむであらう。

有馬が「みられる通りの小誌にすぎぬが、内容は相当自信を持つてゐるつもりである」として発刊した創刊号は、巻頭に津嘉山一穂の「ロッペン島」を持つてきていた。

海面には黒ろきどよめき。何かはしらねど血汐多き海鳴りがきこえる。

よからぬ貝殻をまもりて、をみなのしろき領土は、明け暮れ小さき？のごとき武装にとざされるのである。

丘に於いて。酸味を含める海霧の寢床から、日々消えゆく思索の花火。あるひは香りの元素。

ロッペン達はそのしろき胸に、月食の夜の地球を、また、脂肪のごとき愛撫の暗さを今しも明らかに識別するのであつた。彼女はさむき草叢に産卵した。永久に一個の。単数の秘密へ、寂寥の覆いをかけて。

「ロッペン島」は、四連からなる。一連でロッペン島、二連でオットセイ、三連では水牛と白鷺、四連ではロッペン島とオットセイとを組み合わせ、ロッペン島の孤高、オットセイの権威を披歴し、それぞれの属性として「利己を全うせん」とする姿、「互いに扶助する生活」に焦点をしばり、失つたものに思い及んでいく、といった一編である。

「ロッペン島」は、見られるとおり散文詩である。

昭和四年、北川冬彦は「新散文詩への道——新しい詩と詩人」(『モダニズムの騎手たち』現代詩鑑賞講座9 現代詩

篇Ⅲ 角川書店 昭和四十四年五月三十日)のなかで、「今日の詩人は、もはや、断じて魂の記録者ではない。また感情の流露者ではない、／彼は、先鋭な頭脳によって、散在せる無数の言葉を周密に、撰択し、整理して一個の優れた構成物を築くところの技師である」といい、「新しい詩の構成法がきびしく追及されれば、追及されるほど、無闇に行をかえ、聯を切ることの必然性が失われてくる。そして外観は、散文と殆ど異ならないものとなる。ここに真の自由詩への道の鍵が蔵われているのである。」「真の自由詩への道とは何であるか。」「新散文詩への道」これである。」と主張していた。

北川らの運動を津嘉山が、どのように受け取ったかは不明だが、「構成法」などに関し共鳴する点が多かったのではないかと思う。

津嘉山一穂が『無機物詩集』を刊行したのは、昭和六年二月。同詩集には、「ナハ市 ナンセンス物語」のような、掌編小説に類する、いわゆる「新散文詩」ともいつていい作品が見られる。津嘉山がいちはやく、「散文詩」を手に入れていたことは、「ナハ市」等からわかる。そのような試みができたのは、北川らの運動によるだけでなく、津嘉山が、さまざまな傾向を有する詩人の集まりであった「詩の家」に所属していたということもある。津嘉山は、北川がいうところの「一個の優れた構成物を築くところの技師」のようであったように見える。そしてその「技師」は、「詩の家」の同人間ではいわゆる「超現実主義」の詩人として見られていた。

『無機物広場』に「跋」を寄せた潮田武雄は、「彼の経歴はよくは知らない」がといい、「出産は琉球。そして一九三〇年度に於て『超現実主義』なる言葉が日本の大部分の詩人によつて粗雑な文学的常識としてうけ入れられてみたうちに、彼のみが——『限らない羞恥の傾斜』として、それを対象し、それを分析し、それを愛育してゐた、といふことは事実である」と指摘。そして「私たちの少(小?引用者注)さいグループでは(——主として詩之

家)彼の光芒に競ひ得るものはみなかつたのだ。少なくとも超現実主義を云々する仲間のうちでは——」と書いていた。潮田は、津嘉山こそほんものの「超現実主義」詩人だと揚言していたのである。

津嘉山の略歴を簡潔にまとめたのに岡本恵徳がいる。岡本は、津嘉山が『形式主義詩』運動に共鳴して「詩作を始めたこと、詩集発行後、『リアン』に参加し、「唯物史観とシュールレアリズムの統一をめざした詩運動を展開した」こと、『リアン』の弾圧により、「津嘉山も追われるように東京を離れ、樺太、台湾と居を転じた」(近代沖縄文学史論『現代沖縄の文学と思想』沖縄タイムス社 一九八一年七月二十日)といったことを書いていた。

有馬が、津嘉山に寄稿を求めたのは、津嘉山が、転々と居を変えて行く前のことであつたかと思う。有馬は、津嘉山の詩法が、沖縄の詩人たちを啓発するものになると考えていたからにちがいないし、たぶんそれは射たものであつた。

沖縄の詩人たちも、もちろん旧態依然とした詩を書いていたわけではない。津嘉山の次に登場したのはイケイ雅である。イケイは二編「黒い花冠」//僕//より//僕//の機能へ」と「甲板の風景の一部」を発表している。

#### 甲板の風景の一部

三角波の色が彼女の心を

すつかり巻いてしまひさうなので

わたしは日傘をさしてやる

すると陽はちさく日傘に咲き

波は彼女の愛する詩集の色になつた。

彼女はニッコリして

初夏の、はなやかな対句を口づさむ。

三連からなるもので、その最初の連である。日傘、詩集、初夏といった物象、ニッコリ、トタツトタツといったようなカタカナによる動態表現は、いかにもハイカラで、いわゆるモダニズムの洗礼を受けたことを語るものとなっていた。

近藤東は、渡辺修三に触れて「もしモダニズムが、知的・感覚的・色彩的・絵画的・国際的・時代流行的、それに社会的関心などという形容で特徴づけられるとすれば」(『珠玉詩篇鑑賞』『モダニズムの旗手たち』現代詩鑑賞講座 9 昭和四十四年五月三十日)として、渡辺の詩の特徴を論じていたが、近藤にならってイケイ雅の「モダニズム」の特質をあげれば、「色彩的」であるといえるであろう。

イケイの次に掲載されているのは松山晴児の「詩二つ」で、その一編「(2)バスにあふれる悲しみ」は、次のようになっている。

お客で一杯になったバスの中である。

をんなは、静かに動いて、

傍に坐らせてあつた子供を膝に乗せ、

立つてゐる紳士の為に席をあげた。

二十四五の美しい女である。



三連からなるもので、その一連目である。

松山の詩は、満員のバスの中の一光景をうたったもので、子連れの美しい女性が、立っている紳士のために席を空けたというものである。相手の難儀を自分事のように感受し、相手が楽になるように取り計る、といったあたりかたは、いわゆる人道主義的な姿勢だといつていいものだろう。そしてそのような姿勢をよんだ詩人を、人道主義詩人と規定することができるのであれば、松山も、人道主義的な詩人のひとりであった。

「人道主義的詩人の範囲は、人道主義という概念の広さとあいまいさにもよって、正確な分類・見取り図めいたものは作りがたい」(『大正詩史』『現代詩鑑賞講座12 明治・大正・昭和詩史』角川書店昭和四十四年十月三十日)と、安西均は述べていた。安西はまた人道主義的な立場にたつ詩人として福土幸次郎、千家元麿、尾崎喜八、高村光太郎などをあげていた。安西のあげていた詩人たちの詩業に、松山の詩も通じていることからすれば、松山を、人道主義的な詩人であるといつてもあながち誤りではないであろう。

松山の次に見られるのが、外山陽彦の二編『近代村景』「秋に泣く」である。「近代村景」は、次のようになってい

文化から離陸せる島の飢餓行進デモンストレーションは

ダダイストの彼奴——産物の降誕祭ハルマに始まる烈しい暴風あらしは幾万坪の穀の一粒をも奪ひ去り、幸福を喪失せる村はムスメの肉を啖ツツカつて火酒ウツカを温むるのみ

自らを紡績に呪縛せしムスメは瘦咳と太鼓腹の土産。俸給不渡に泣く訓導も哀れ人の子、感情の欠片かけら。道徳の条理から崩落れた役場は『醜』のシルエツト。貧者は金は無く、富者に税金御免の形。

島を色彩する田畑も季節ペールの面紗

ザクザク踏む石ころの一つにも最早飢餓が侵蝕する。余りにも落莫の海山、これが遠い日の豊かなる故郷シマか、あゝ逃げる事の出来ない地獄の無軌道を具象する。

一連目は、島の貧困、二連目は、出稼ぎの悲哀、三連目は、荒廃する村を歌ったものである。沖縄はよく知られているように、大正末から昭和初期にかけて、経済的な破綻で窮乏の極に達し、『蘇鉄地獄』の島と称されるほどになる。若者たちは、島を捨て、海外への移民、県外の紡績へ出稼ぎに出ていく。

そのような村落の状態を切り取ってみせたもので、一種のプロレタリア詩といったものになっていた。

外村の二編に次いで登場しているのは與儀二郎である。與儀は「短章」として、「群像」「西日」「ある時」「月夜」「百姓道」の五篇を発表していた。

### 群像

異様な樹木である

さびしいのだらう

みんな夕日に顔をむけてゐる。

西日

西日に咲いてゐる枇杷の花は

暖かそうだ

月夜

道の角で鈴懸の枯葉を蹴る

長い詩で四行、短いのは一行。いわゆる短詩と呼ばれるものである。短詩といえ、安西冬衛の「春」と題された「てふてふが一匹韃靼海峡を渡つて行つた。」や北川冬彦の「馬」と題された「軍港を内蔵してゐる」が有名である。「馬」は北川の第三詩集、昭和四年に刊行した『戦争』に収められた一編。

北川の短詩は、第一詩集の『三半規管喪失』(大正十四年一月刊)にも見られるが、大正十五年十月刊行された第二詩集『検温器と花』に結実し、『戦争』に収められた「馬」で完結した、といえるだろう。

「短詩運動」を引く張つていった安西は、のちに「新散文詩」を提唱していく。そのことについては、先に触れたが、安西や北川の「短詩」が、外村を動かし「短章」を書かせたといつていいだろう。

外村の次には有馬潤の「妻へ寄せる詩」を置いている。

“あんばいが悪いから来てくれんか”とのたより

年老つた、たつたひとりの母だから末ツ子のおまえがみたいのだ、

こんなときには、おまえはわしの妻であるより、

早やうお母ツさんのかはいい、いい子になつて行け。

「作品」の最期に置かれた有馬潤の詩編は、三連からなる。一連は、病気の妻の母を氣遣い、はやく看護に行くようにと妻をせかす「わし」を、二連は、一、三日したら帰ってくるからと子ども背負つて出かける妻を、三連は、嫁に来て家事に追われ苦勞するばかりの妻が、愛しく思われるといったことをうたつたものである。相手を思いやるやさしいところを、平易なことばで綴つた一篇である。

有馬潤の詩集『ひなた』が刊行されたのは昭和六年。佐藤惣之助が「序」を寄せているが、佐藤はそこで「佐藤君のものを読んでみると、なんの理屈もなく、そのまま心がほだけてきて、やさしい気になつてくる。たとへばそれは冬の日向のやうな、おのれといふものの角をとつて凡ての理論や巧みをすてしまつて、只その肌あいと、しづかな呼吸づかいとだけになつてしまふ。もちろんその視野は決してひろいとは云はれないが、おのれの形と影そのものとは、なんの飾りもなしに、そつくり彷彿とあらわれてくる。そこには春のもの影のやうな、秋のかげりのやうなものがやさしく添ひ、一面には幼心とか、或いは小鳥とか野の草のやうな弱々しい、それでゐて純一なものが水のやうにいる。」と讚っていた。また、佐藤は「この前故人になつた八木重吉君の手法がこゝにあきらかに伝えられてゐる」と、指摘していた。伊波南哲も「落葉を焼く煙」で『ひなた』の読後感を述べた後、「日本では、山村暮鳥、八木重吉などが、有馬潤と同じ傾向の詩を書いてゐた。」と指摘していた。

有馬潤の詩は、佐藤や伊波が指摘しているように、八木重吉などと傾向を同じくする詩だといつていい。

斎藤正二は、八木について、詩壇の趨勢について全く興味がなく、「朔太郎・犀星・春夫らの感情主義も、省吾・百治らの民衆詩派も、大学・八十らのサンボリズムも、重吉に影響を与えることがなかった」（『八木重吉』）歴艇派の人びと』現代詩鑑賞講座 8 昭和四十四年七月三十一日）と述べていた。それは、八木が、詩壇のどの派にも属することがなかったということなのだろうが、八木と傾向を同じくする有馬は、「詩の家」の同人であった。そして、どちらかといえば「民衆派」の一員に数えられるのだろうが、「民衆派」的であるというより、より家庭的で日常的であった。身の回りのそれこそささやかな出来事に気をくばり、そこに人生を見いだしていったといえるからである。

『闘魚』第一輯に登場した詩人は、津嘉山一穂、イケイ雅、松山晴児、外山陽彦、与儀二郎、有馬潤の六名であるが、傾向を同じくするということがなく、それぞれに、ことなる趣向の詩を書いていたりといっている。

有馬は、「編集後記」で、同人たちについて「津嘉山一穂君はぼくの無二の親友。名声嫌ひで、表だつて詩壇に顔をみせぬが、彼の力量は中央詩壇で高く評価されてゐる。與儀二郎君は旧爬龍船同人。短歌方面でも驚異を持つて注目されてゐる詩人。故山口芳光兄の親友。久しく詩作から遠ざかつてゐたが、今度闘魚の仲間に入つて、詩の一兵卒に立ち返つて精進することになった。イケイ雅君とは未知の間柄だが、遠く伊平屋の島から仲間に加つて貰つた。傑れた、鋭い感覚を持つた詩人である。松山晴児君は闘志まんまんたる熱情的詩人。外山陽彦君は隠れたる詩人」と書いていた。『闘魚』は、そのように有馬の旧知の人、旧同人誌の仲間、表立つた活動をしていない者、そして未知の人に呼び掛けて発足しているが、彼らは、それぞれに異なる傾向の詩を書いていたのである。それは、有馬が、そのようなことを図つてのものであつたのかどうかかわらないが、昭和初期の詩壇の状況をきわめてよく反映していた。

『鬪魚』は、「党派の詩誌ではない」といい、「プロであらうが超現実派であらうがおかまひなし」だが、「純同人制」をとっているのです、だれにでも紙面を提供できるというものではないので、同人希望者がいたら申し込んでほしいと、呼びかけていた。

『鬪魚』が、「党派的」でないのは、掲載された「作品」を見ただけでわかる。プロレタリア派の詩、超現実派の詩と通じて行く作品だけでなく、モダニズム系や民衆詩派系、そして日常生活派系に分類できるような詩がそこには見られた。それはまた、昭和初期の沖繩詩壇の状況をよく語るものともなっていた。『鬪魚』が、大切な同人雑誌であるのは、そこにあると言っているが、あと一点、当時、県内外で活動していた詩人たちについての情報を提供しているところにもある。

『鬪魚』は、「作品」だけでなく「評論」も掲載していた。「評論」は、有馬潤の「沖繩詩人一瞥」と題されているものだが、昭和初期に活動していた詩人たちを一覧するのにこれほど恰好なものはない。

「沖繩詩人一瞥」は、(一)と(二)からなる。(一)では、県外で活躍している詩人たち、(二)では、県内の詩人たちをあげて、簡単な紹介をしている。

(一)で挙げられている詩人は、伊波南哲、国吉真善、山之口獯、津嘉山一穂、仲村渠、新屋敷幸繁、新屋敷つる子で、(二)では桃原思石、宮里静湖、仲泊良夫、川島涙夢、川野逸歩、又吉祐三郎、イケイ雅、花白みさほ、松山晴児、大浜妖をあげ、そのあとに平良好児、丘陵志、喜友名青鳥、野村芳樹といった名前が並んでいる。

有馬は、(二)で県内の詩人をとりあげる前に、次のように書いていた。

「沖繩詩壇」なる名称に就いては、いろ／＼最近論議されてゐるようだが、論議されるだけ沖繩在住の詩人

に問題とされるものが、ある筈である。詩人在つての詩壇である。ぼくは沖縄詩壇なるものは、現在建設されつゝあると明言したい。さて建設されつゝある沖縄詩壇なるものを、展望する場合、それに、立ち上る詩人の群を見る。それ等の有名も、無名の詩人を、チャンポンにしてふるひにかけて摘出してみやう。

有馬によって摘出された沖縄で活動していた詩人たちの名前が(二)に並べられていたのである。一九三〇年代には、そのように、多くの有名無名の詩人たちが、沖縄の詩壇を賑わせていたのである。

## 2

『闘魚』二輯が刊行されたのは昭和八年七月である。目次は次のようになっている。

與儀二郎 山を見てみると他六篇

イケイ雅 ハトロンの凶面

外山陽彦 運命を折檻するもの

有馬潤 隣り屋敷他二ツ

仲泊良夫 抽象の魔術

散文 青葉の頃の感想

闘魚寸評

消息・後記

『鬪魚』創刊号に登場した四名に、仲泊良夫が同人に加わり、「抽象の魔術」で登場。「抽象の魔術」は、第五章からなるが、その「第一章」は、次のようになっている。

私の優美な細長い宝石質の鉛筆は装飾された夜の裸麦を創造する。智性の雛鳥はいま帆立貝をつけた春のヴィナスと共に生誕したばかりである。私の厳正な想像の頸をめぐる純潔なる夢の微風。芳香性ある水差の如き処女もまた純潔である。太陽と白鳥と昆虫の群がる女優の衣装は抽象の花園に薫る薔薇の指をかすめる。私の麗はしい瞳は遠く人魚の倫理を要求する。要するに私は高価な物質を夢ばかりを飲んでゐる個性を失つた俳優に過ぎない？

「抽象の魔術」は『鬪魚』への初登場ということもあつてか、いわゆる自己紹介といった形をとっていた。第一章では「私は高価な物質と夢ばかりを飲んでゐる個性を失つた俳優に過ぎない？」といった自問、第二章では「私は天主の専門語のみを使用してゐるに過ぎない」という自己規定、第三章では、「私は音を発することなく発光する文明の夜光虫である」といった自己表示、第四章では、「私は私の創造に就ては極端な孤独のタングステン電球である」といった独自性の誇示、第五章では、「私は博物館から天真爛漫な噴水塔へ流星のやうに飛び込む」といった伝統を逃れて湧き出す新鮮な潮流に向かう自己改革者としての姿勢を示した、いわゆる宣誓の一編としてよめるものであつた。

詩に散りばめられた物象、さまざまなレトリック、飛躍、そして転換といった詩法は、たぶん当時流行した



シュールリアリズムに学んだものであった。

大岡信は「昭和詩史一」(『明治・大正・昭和詩史』現代詩鑑賞講座12、角川書店 昭和四十四年十月三十日)で、滝口修造らは西脇順三郎とともに「昭和二年、コレクシヨン・シュルレアリストと銘うって、合同詩集『馥郁タル火夫ヨ』を刊行した。西脇以外では滝口のテキストが、シュルレアリズムの自動記述や夢の描写の方法に学んだ、鋭い映像美をもつ錯乱的な言語実験の成果を示していた」といい、続けて「シュルレアリズムを標榜したグループはもう一つあった。上田敏雄、上田保、北園克衛、富士原清らで、昭和二年『薔薇・魔術・学説』を創刊し、更に昭和三年十一月には、『馥郁タル火夫ヨ』のグループと合同し、翌年六月まで、シュルレアリスム機関誌『衣装の太陽』を出した。彼らのほか、独自にシュルレアリストのブルトンやエリュアールと文通していた山中散生を加えると、いわゆるシュルレアリスム系の詩人たちの一群が形づくられる」と書いていた。

仲泊良夫が、どのグループに学んだかはわからないが、「いわゆるシュルレアリスム系の詩人たちの一群」に学んだことだけは間違いない。

有馬潤は『鬨魚』の創刊号で「沖繩詩人一瞥」として、県外、および県内で活躍している詩人たちを紹介していたが、後者で仲泊良夫について、「唯一の超現実派の詩人。それだけに彼の存在は孤立してゐる。彼の詩はたしかに純粹なるものがある。彼はどの角度から、どういふ方向に対して詩を作っているかを知つてゐる。彼はいつまでも聡明なシュールリアリズムを標榜するだらう」と書いていて、彼の独自の詩法について、いち早く紹介していた。

『鬨魚』は、第二輯で、さっそく新しく加入した同人の詩を掲載していた。それに自信を得たのであるうか、「後記」で、「第二輯をこゝに送る。今月から月刊にする。締切は毎月二十日、同人はそのつもりで原稿を忘れずに」と書いていた。

『鬪魚』第二輯には、同人五名の作品のほかに、有馬潤の「青葉の頃の断想」が掲載されていた。そこで有馬は、『鬪魚』創刊号に対する批評が「琉球紙」に三つあったとして「江河、沈念坊、花城具志、宮里静湖三氏のそれである」と紹介している。「琉球紙」は、たぶん『琉球新報』だろうが、「四氏」の筆名をあげながら、「三氏」としている。後の一つは、他紙に掲載されたものであるということだろう。

有馬は、三名の批評を取り上げ、三名それぞれの「批評的立場」について、江河氏は「溺愛的印象批評」であり、花城氏が「漫文的主感評」で、宮里氏は「文学的論旨に立脚した客観評」であったと指摘し、「三氏の批評の中、何れが正しい批評であるかは、私としては云ふ必要はない」としていた。そしてそのあと、詩の批評及び詩作についての自説を展開し、最後に、全国で発行されている同人雑誌で注目したいものとして『女人詩』をあげていた。

有馬は、『女人詩』に拠る女流詩人の「生命力の旺盛さ」を賞賛したあと、「詩人らしい女流詩人が一人もゐないわが沖繩詩壇の惨さが痛切に感じられてしかたがない。詩運動も一つの文化建設である位はわかまへて欲しいものだ。これでは沖繩の女性は他県の女性よりも、文化の一端に於ても一歩退却せる位置にあると云はれても仕方があるまい。」と、女性の奮起を促していた。

『鬪魚』にも女性の作品はみあたらない。それは『鬪魚』だけではなかったであろう。昭和八年といえ、久志富佐子の小説「滅びゆく琉球女の手記」が発表され物議をかもした年である。すでに小説を発表していた新垣美登子をはじめ小説を書く女性や水野蓮子、野沢仙子といった歌を詠んでいた女性たちはいたが、詩の表現者は見当たらない。詩を書く女性の登場はもう少し、待たなければならなかった。

『闘魚』第三輯が刊行されたのは昭和八年九月。目次は、次のようになっている。

作品

新屋敷幸繁　わが愛する人々の中へ

宮里　静湖　ふるさと

イケイ　雅　アル現象ノ線

南　青海　海浜

川野　逸歩　寝る前

與儀　二郎　七月詩編

外山　陽彦　護岸

仲泊　良夫　世界の創造

評論

伊波　南哲　詩人の貧縮時代

受贈誌寸評・後記

第三輯からは、四名の詩人が加わっていた。有馬が、第二号の「後記」で、「第二号をこゝに送る。今月から月刊にする。」と宣言したのは、成算があつてのことであつたように思えるし、第三輯は、そのことを示していたが、

発行が八月ではなくひと月遅れの九月になったのは、同人誌の刊行が容易でないことをそれとなく語っていたといえよう。

初登場の一人、新屋敷幸繁の「わが愛する人々の中へ」は、次のようなものである。

私は友達を欲しがつてゐる

結局あとに残る友達は私一人かもしれないが

それでも私は友達を欲しがつてゐる

「わが愛する人々の中へ」は、六連からなり、友達が欲しいこと、しかし友達は離れて行くこと、突き放されることで強くなっていくが、そのためにも友達が欲しい、そして無私になれば、力もわいてくる、とうたつた一編である。他につながりたいと願う積極的な姿勢は、人道主義的なグループに見られる一面であった。その好日性的な傾向のよく出た一編であった。

宮里静湖は「ふるさと」「黄色いとしび」の二編で登場。「ふるさと」は、つぎのような一編である。

薄暮

夕霧しめやかに這ふ一筋の海岸道路をゆく

岬の彼方、夕あかりの空に

遠く忘れかけた

ほのかな愛情がよみがへる。

五連からなるもので、その一、二連である。これだけでも、宮里の詩の特徴は十分にわかる。

作品は題名になっている「ふるさと」を歌ったものである。最後の連の一行を「父母はわたしを待つのである」と閉じている。小波が浜を洗い、アダンの花がかおる十六夜、その光をあびて、フクロウも泣いているであろう里を私を待つ両親を歌った一編で、抒情性溢れるものとなっている。

抒情詩派の結集した『四季』が創刊されたのは昭和九年。『鬪魚』の創刊は昭和八年。宮里が『四季』に掲載された詩群を読むのは「ふるさと」を発表した以後ということになる。宮里が、「四季」派の詩人たちの詩を読んだのは間違いないが、宮里の詩的出発は「四季」派以前の詩人たち、例えば室生犀星あたりに求めたほうがいいであろう。それは、宮里静湖の文学的出発の時期から考えてもそういえるからである。

新屋敷、宮里らとともに新たに加わった南青海の作品は、次のようなものである。

海の下ウムを鷗は飛び交ふ。

妖女の股を滑つて積雲に傾倒する赤い帆の快走舟。パラソルの花咲かす白日の海浜は海の魔術を呼びて人魚等の瞳を吸収し、文明の化粧を剥ぐ。広茫のパジャマを引裂き、褰に隠れ、戯れる人魚等の魅惑の腰は艶麗な波紋に震へる。

陸と海との境界に立ちて愁眉な眉等は寧ろ海の遊泳術を撰ぶか？環状の浮袋に救助される白い人魚等よ、海

浜の夏も又あなた達に属する。

題名が示しているように夏の「海浜」の情景をスケッチした一編である。入道雲の下を快走するヨット、日傘のしたで戯れる女たちの艶麗な肢体、おぼれて救助される人たち、いずれも夏の海浜の一コマを写し取ったものである。

北原白秋は、大正後半期の詩壇を「純正叙情派、印象派、象徴派、神秘派、影象派、民衆派、新民衆派、未来派、表現派、ダダ派入り乱れて、遂に收拾すべくもなくなった」(安西均「大正詩史」『明治・大正・昭和詩詩』)と概括しているそうだが、南の詩をあえて位置付けるとすれば、「影象派」ということになるであろう。「海浜」は、海辺の光景を一コマ一コマ鮮やかに切り取っていた。

川野逸歩は、「寝る前」照る日「灯のつく頃」の三篇を発表している。いずれも短かい詩で「寝る前」は、次のようになっている。

——偉くなつて貰ふぞ！

児が生れたときの感激を忘れない。

その児も五つになつて

他に勝るところを見せて悦びたがるわい。

その児の寝姿に見入りながら

自分の期待が眠の前に躍り込むやうで

大きなことを考へる父であつた。

子どもの将来を期待する父親を歌つたものである。

「照る日」は、汗だくになつて働く娘たちを涼ませてやりたいという思いを、「灯のつく頃」は、父親の存在のありがたさをうたつたもので、三篇ともにありふれた日常風景を映し出し、心温まるものになつていた。その詩を、あえて分類するとすれば、いわゆる民衆派に属するもので、詩の作法には大きな違いがみられるが、有馬潤に通じるものがあるといつていいだろう。

『鬪魚』三輯の「作品」は、以上だが、その他に伊波南哲の「評論」があつた。「詩人の貧縮時代——われらは如何にしてこれを闘ひ抜くべきか——」と題されたそれは、すべてが「非常時の名に於て統制され、批判され、吟味されつつ」あるなかで、詩人たちも逃げ腰になつて醜態をさらしているが、当局に、危険視され、弾圧され葬り去られてしまうというのは杞憂であり、「取越し苦勞」であるという。そして、現今のような「詩人の貧縮時代」に於いては、「本格的なよき詩人」に道は開かれ、「似非非詩人群」は、泡沫と化してしまふであろうし「時代の大きいなる篩の手」にかけられて残り得る詩人はそれだけに異常なる努力と根柢強い闘ひが肝心だと主張していた。

滿州事変が勃発したのは昭和六年。国内、国外を問わず、時代はまさしく「非常時」と呼ぶしかないような社会状況を現出、日常生活の面だけでなく、詩人たちの表現活動にもそれは追いかぶさつてきていたことが伊波の「評論」からわかる。そこで伊波は、そのような時代の沈滞を破るものこそが「優れた詩人」であると強調していたのである。

『鬪魚』第四輯が刊行されたのは昭和八年十一月。目次はつぎのようになっている。

作品

花城具志 十月・他二編

宮里静湖 秋の素描・他一篇

伊波南哲 運命の荷車

有間 潤 無題・他二編

與儀二郎 生活編

宮良高夫 出発・他二編

南 青海 夢の沃地・他一篇

評論

福治友衛 三面鏡

伊波南哲 鬪魚三輯寸評

受贈誌紹介 後記

四輯から「作品」欄に登場したのは花城具志、宮良高夫の二人。花城は「十月」「城」「鶴」「風」の三篇、宮良は「出発」「初秋」「浜辺」の三篇を發表していた。



少女鶴はしかし少しばかりの金のことで暗い街の方へ行つて了つた。今では花やかな酒宴の一隅で鶴は銀の簪を頭の頂に光らせてゐるのか。丁度不幸な信号のように。

暗い博物標本室の中で私はかびくさいしかし正しい姿勢の鶴をみつけた。鶴はその長い嘴で何を刺し、その長い蹠で何を破らうとするのか。そしてこの大きい翼を広げて昇天するのはいつなのだらうか。鶴に続く無数のまづしい鶴達。

「鶴」と題された一編である、一連で、鶴と言う名の少女が、遊郭に売られていったことをうたい、二連では標本室の鶴をうたい、三連で、鶴の叫び声に浅い夢を破られることもあった、としめ括っている。少女の名前から標本室の鳥のはく製へ、語音を等しくする事から生まれて来た連想で、生と死、俗と聖とのあざやかな対照をうつしとつた一編である。花城の作品は、「十月」の「今日」を過去、現在、過去とたどるかたち、「城」の擬人化、「風」のやはり同音の導き出してくる事象等、いずれも才知の閃きを感じさせるものとなっていた。

あと一人初登場の宮良は三篇発表していた。

恋人を抱き締めたら

あゝ 体いっばい

こんなにも力が溢れて来る！

「出発」の一連目である。四連からなる詩は、はちきれんばかりの健康な肉体を歌っていて、まさしく「出発」を飾るにふさわしい一編になっていた。「初秋」では、美しくなった娘を、「浜辺で」では、恋する乙女を、といったように、みずみずしい感性をいかになく發揮して宮良は登場していた。

『鬪魚』は、そのように毎号新人の加入があつて、しかも傾向の異なる詩が見られた。それは『鬪魚』に限らず、沖繩の詩壇にとつてうれしいことであつたといつていい。

『鬪魚』は「作品」だけでなく「評論」も掲載していた。『鬪魚』が、昭和初期の沖繩詩壇の様子を知るうえで大切な雑誌となつているのは、そこにもあつた。第四輯に掲載された福治友衛の「三面鏡——私のノートより——」はその一つである。

福治は、創作の少なさにくらべ、詩作品が多いのは、「沖繩の文壇」の不思議な一現象であるが、その多くは、取り上げるほどのものでもないとして、

少数の有名詩人を除く他、其等の総てが、自己の詩に対して、的確か(な? —引用者注)世界や方向を持つてゐなく、単なるイミテーションであり、自然発生的であり、厳密な意味に於ける詩でなく、「詩に似たもの」だからである。それは、

一体何に起因することであらうか? 云ふまでもない。自己の詩作活動を勇敢にし、飛躍せしめるところのオリヂナリテイ、——所謂詩の本質に対する概念の正確な構成に無頓着だからである。

としていた。

そして福地は、沖縄の文壇が進歩しないのは、例えば西脇順三郎のような「指導理論家乃至評論家」を欠いているからであり、従来の「独断的批評を一新する」には、「新しい批評家の出現」が必要であり、それを「詩壇に期待」したいという。

福治の「エッセイ」は、そのあと、「プロレタリア文学」の衰退、有馬潤と仲泊良夫を取り上げ「並行的詩人」であると指摘、最後に「小説が書けないから詩を書く」といった態度を芥川龍之介や横光利一、トルストイやボオドレルを例に出し、批判して終わっていた。

福地の主張に特別な新しいものがあるわけではないが、少なくとも、有馬潤が評価されていたことがわかる。有馬潤は、しかし詩作が評価されただけでなく、編集者としても評価されていたのではないかと思う。『闘魚』に集まった詩人たちをみてもそれは一目瞭然だからである。

『闘魚』第四輯の「雑記」に有馬は「今輯は別に原稿の催促はやらなかった。集まったものだけで編輯することに。今後も別に催促しないつもりだ。締切日は厳守。小生も忙しい身。事務的なものはキチンとやつて貰った方が世話がない。次輯は十一月二五日」と書いていた。

原稿の督促はしない、しかし、締切日は厳守と言明したのは、雑誌の発行に絶対的な自信があったからである。そしてそれは、第四輯まで発行して来て得た自信であったに違いないが、第五輯は、不明である。

『闘魚』は、第四輯で終わっていたのではないか。それは、原稿が集まらなくなったためではなく、伊波南哲が「詩人の貧窮時代」で書いていた「非常時の声」が高くなってきていたことと関係していたのではなからうか。伊波は、「当局の弾圧が激しく、少しでも社会学的批判の鋭鋒を向けると直ちに危険視され一朝にして葬られて仕舞ふ」と

いったようなことは「杞憂」にすぎないし、「本格的な詩の運動が何ら危険視される憂へがないばかりか、断じて当局の弾圧など受く可き性質のものではないことをはっきりと言つて置きたい」といい「それら杞憂は日和見主義からくる取り越し苦労といふものであらう」と断じていたが、「非常時」は、伊波が想像していた以上にすすんでいたといえるし、出版に関しても、圧力がかかりはじめていたと思われるからである。

『闘魚』が、何輯まで刊行出来たかはつきりしないが、昭和八年限りの四輯だけが残っていた。四輯だけだったとはいえ、昭和初期の沖繩詩壇をよく映し出したものになっていたことは、いくら強調しても強調しすぎることではないであろう。

5

大岡信は「昭和詩史二」(『明治・大正・昭和詩史』前出)を、次のように始めていた。

昭和詩と一口にいうが、それは必ずしも昭和改元後の詩という意味ではない。今日ほぼ常識となつた概念として、昭和詩はだいたい大正十年ころから始まっているとみてよいだろう。それは、昭和初年代の詩の大局的な動向を決した諸種の詩運動や新しい社会意識、新しい詩観が、大正十年ころから、明らかな胎動を伴つて、一世代全体の動きとして、日本近代の詩の歴史に新段階を刻んだということがいえるからである。

大岡が指摘しているように、「昭和詩はだいたい大正十年頃から始まっている」と言われるが、沖繩の詩壇はどうだったのだろうか。

昭和初期の沖繩詩壇の様子は『鬪魚』で見て来たとおりが、『鬪魚』に名前があがっていた詩人たちいわゆる昭和期の詩人たち伊波南哲、国吉真善、山之口獺、津嘉山一穂、仲村渠、新屋敷幸繁、新屋敷つる子、桃原思石、宮里静湖、仲泊良夫、川島涙夢、川野逸歩、又吉祐三郎、イケイ雅、花白みさほ、松山晴児、大浜妖、平良好児、丘陵志、喜友名青鳥、野村芳樹たちの活動はいつごろから始まっていたのだろうか。

彼らの名前が、いつ頃からでてくるのか、ここでは『沖繩教育』の文芸欄で見て行くことにしたい。

『沖繩教育』は、沖縄県教育会の機関誌で「その内容は、教育に関する論説のほか、教育の実践記録などから構成される。これらにくわえて関係する会議や研究会の記録、島の歴史や民俗に関する調査、また詩歌などの文芸欄、他誌からの転載記事などが掲載されている」(藤澤健一・近藤健一郎「解説」『沖繩教育』解説・総目次・索引)不出版 二〇〇九年十一月二十五日)ものである。

機関誌には欠号があるだけでなく、一一六号(一九一八年)から二一九号(一九三三年)までは、まるまる四年間にわたって不明である。昭和詩がはじまるとされる一九二一年からからでもほぼ三年間は空白になっているのである。

現在見ることでできる一九二三年一月一日発行一三〇号からみていくと、同年二月一日発行一三一号に間国三郎、光一路、一九二四年一月一日発行一三二号に上里春生、世礼国男、古波鮫唯信、同年四月一日発行一三五号に江島寂潮、同年七月発行一三八号に白浜冷夢、松根星舟等、有馬は挙げてなかったが当時知られていた詩歌人の名前が見られる。

有馬潤が挙げていた名前が現れるのは、一九二四年九月一日発行一四〇号からである。川島涙夢がそうだが、川島は、詩ではなく短歌を発表していた。その後一四一号、一四二号、一四三号、一四四号、一四五号、一四六号と短歌を發

表、一九二五年九月一日発行一四七号に山之口貌の詩二編「まひる」「人生と食後」が掲載される。沖縄の昭和詩を代表する詩人の初登場ということになる。そのあと貌は「彼」を一九二六年九月一〇日発行一五六号に発表していた。

『沖縄教育』への初登場を飾った「まひる」は、次のような詩である。

乾燥した城跡の裏路の日向

クロバイの汚みた白い服があらはれ

苦熱のまんなかにあられ

サーベルの音が蠟のやうに溶け

私のまつげには

軽蔑の憎悪みがぶらさがり

さてー

嗜眠性脳炎に侵された太陽の看護には

とろとろ飽いて

横走蟹のやうに、

四辻の

交番にぱったり突きあつたのが

足の太い

年増の女だ。

『思弁の苑』に収められた詩編とは全く異なる詩風とはいえ、窈らしい表現が随所にみられるものである。

窈のあとに登場してくるのが宮里静湖（一九二六年一月一日、一五〇号「午後四時」車夫」二編）、与儀二郎（一九二六年二月一〇日、一五一号「十二月の戯心」）、新屋敷幸繁（一九二六年一〇月一〇日、一五七号「故里訪問詩集補遺」）、桃原思石（一九二六年十一月一〇日、一五八号「秋の感覚」）、中泊良夫（一九二七年二月一〇日、「百貨店のアヴァンテュール」）、といった詩人たちである。

一九二五年から一九二七年にかけて、沖繩の詩壇に、新しい動きが出ていたことが、『沖繩教育』からわかる。同時に彼らの活動が、『鬪魚』を生む一因にもなったはずである。

『沖繩教育』の学芸欄は、埋め草程度のものであったとはいえ、一九二五年ごろから昭和詩の胎動がはじまっていたことを示す大切な機関誌であったのである。